

書 評

NHK取材班 編著

産みたいのに産めない 卵子老化の衝撃

小 玉 正 志*

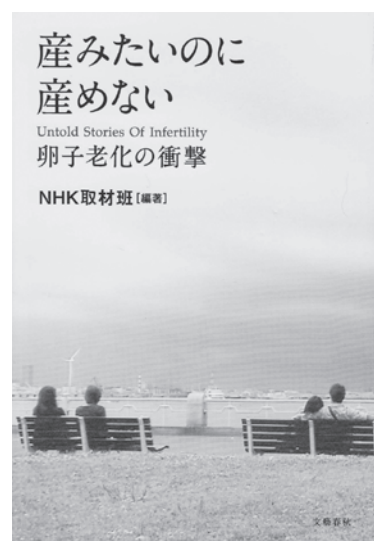
この本は、将来、自分の子どもを持つであろう学生たちに、是非読んでもらいたい本である。本書では、20歳の女性が読んだ場合、その女性が子どもを産めるタイムリミットは、ほぼ15年であるという事実が突きつけられている。しかし、この事実を知っている日本人はとても少ない。

日本は、過去にないほど出生率が減少している。その原因の一つとして卵子の老化による不妊があげられる。日本で行われている学校での保健に関する教育では、卵子の老化について全く触れられていない。イギリスの大学教授が日本の現状について指摘した言葉で「日本は不妊についての正しい知識が不足している上に、不妊について話すことを避けてきた。そのことが新たな不妊を次々に生んでいるのだ。このままでは、日本は次の世紀を生き延びることができないでしょう」がある。本書は、この状況を変えることができるのか？そのために何が必要なのか？についてその手がかりを求めて、国内外を駆け巡った取材班の記録である。そして本書は、HPアクセス100万件という大反響を呼んだNHKスペシャルを単行本化したものである。

ここで大きな問題として取り上げられているのは、不妊治療を希望してくる30代後半の母親が、不妊の原因は卵子の老化にあると言うことを初めて知る事実である。世間によく知られていることは、35歳を過ぎると、染色体異常などの生まれつき体に障害を持った子どもの出生率が高くなるということであるが、30代で卵子が老化してしまうという事実は、教育されていない。今、「美魔女」や「アンチエイジング」という言葉が飛び交っているおかげで、いつまでも若々しい30代、40代の女性たちがあふれている。しかし、外見は若く作れても、人間が持っている「卵子」は確実に年をとっていくということである。卵子の外見は変わらなくても、35歳を過ぎるとなかなか出産までに行かない。「高齢でも体外受精などの高度治療を受ければ妊娠できる」と考えている患者が85%と非常に多い。

日本は体外受精件数、クリニックとも世界一であるが、採卵一個あたりの出産の割合を見ると18%で、20%に満たないのは、先進国の中で日本だけである。体外受精を行う女性の内40歳以上の人の割合は30%で、他の先進国の2倍から4倍になっている。

不妊治療の初診患者の80%が35歳以上、初診患者の平均年齢は36.3歳であり、過去10年間で3歳も年齢が上がっている。この原因として、社会的背景がある。それは、雇用機会均等法が施行されることで、社会人として成長期となるのは20代から30代前半で、丁度、妊娠適齢期と重なってしまう。キャリアを積んで、仕事が落ち着いたときには30代後半となってしまう。女性の社会参画が進み、晩婚化、晩産化はいまや先進国の社会問題となっている。日本以外の先進国では、



*弘前大学教育学部

Faculty of Education, Hirosaki University

他の健康問題と同等に扱っているか、国を挙げて取り組んでいるが、今の日本では、不妊に関する議論もなされず、不妊に関する知識も乏しい。本書では、男女とも若いうちから、特に社会に出る前の学生に不妊の知識を啓蒙するべきと述べている。

〔文藝春秋 1,400円〕